

# ワークショップ「20世紀フランス文学と写真」

2010年11月6日(土) 13:30-19:00

東京大学本郷キャンパス法文2号館中二階・教員談話室

## プログラム

### 第1セッション：写真による文学の変容 13:30-15:10

司会：澤田直（立教大学）                      コメンテーター：滝沢明子（学術振興会特別研究員）

—「シュルレアリスムの反=写真的条件——肖像写真の使用法について」

鈴木雅雄（早稲田大学）

—「プルーストと写真——印象、記憶、技術」 坂本浩也（立教大学）

—「〈逸話的自我〉——バルト『明るい部屋』再考」 塚本昌則（東京大学）

### 第2セッション：イメージ論の現在 15:20-17:00

司会：鈴木啓二（東京大学）                      コメンテーター：桑田光平（東京外国語大学）

—「ベンヤミン〈アウラ〉論の現在」 久保哲司（一橋大学）

—「サルトルのイメージ論——不在の写真論をめぐる」 澤田直（立教大学）

—「クロソウスキー——シミュラクルまたはイメージの終焉」 兼子正勝（電気通信大学）

### 第3セッション：写真はどのような媒体なのか 17:15-19:00

司会：塚本昌則（東京大学）                      コメンテーター：畠山直哉（写真家）

—「言葉にならない、あの感じ」 管啓次郎（明治大学）

—「写真を語るとは何か——報道写真研究と展覧の新動向」 今橋映子（東京大学）

—「写真への抵抗——現代小説と写真」 野崎敏（東京大学）

ボードレーは、写真は「諸科学、諸芸術の下婢（はしため）」という「本来の義務」に戻るべきだと言った。しかし二十世紀に入り、写真は記憶の保管所にとどまるどころか、手に触れえぬもの、想像しえぬもの、さらには〈魂〉の領域にさえ迫っているように見える。写真はどのようにして、テキストの奥底に浸透する力を得てきたのか？ 本ワークショップでは、写真をめぐる言説が提起する問題やその可能性を、さまざまな角度から探る。

二宮学術基金によるワークショップ

主催：東京大学文学部フランス文学研究室

Tel : 03-5841-3842 E-mail : futsubun@l.u-tokyo.ac.jp